

お寺の美しい景観を彩って来た木々の葉も秋から冬にかけて次々と落葉し、普段よりも多くの時間をその掃き掃除に費やすようになります。それが少し落ち着く頃にはもう年の瀬を迎えます。年末恒例の大掃除である大煤払いおおすすはらの様子を、ニュースなどでご覧になったこともあるのではないのでしょうか。

禅ぜんの世界では古来より掃除を始めとした肉体労働を大切な自己研鑽の場と考えてきました。作り、務めると書いて作務（さむ）と読んでいます。その精神は中国唐とうの時代の百丈ひやくじょう禅師ぜんじの「一日なさざれば、一日食らわすくら」、作務さむをしない日は、食事を頂くに値しないという言葉にも見出されます。

この百丈ぜんでら禅師は禅寺の住職として、高齢になってからも若い修行僧達と変わらぬ作務を日課としていました。そんなある日、修行僧達が高齢の百丈禅師の体をおもんばかって作務を辞退して下さるようお願いしましたが、中々聞き入れてくれません。そこで修行僧達は一計を案じ、百丈禅師の作務の道具を隠してしまいました。すると百丈禅師は、食べ物を口にしませんでした。心配した修行僧達はそのわけを尋ねた時に発した言葉が「一日なさざれば、一日食らわす」でした。それを聞いた修行僧達は作務の道具をお返ししたそうです。

この逸話だけだと、作務を通じて貢献しない者はお寺に住む価値が無いかのように思われかねませんが、そもそもインドで仏教が起こって以来、出家者は生き物を殺める危険性があるとして野外での労働を避けてきました。百丈禅師程の方であればその位のことは無論ご存知であったでしょう。では何故作務という労働行為を大切にするのでしょうか、掃除をしてきれいにするとか、畑仕事をして作物をつくる、とかだけではない大切な意味が隠されているのではないかと思います。

仏教では、良し悪し、損得、きれい・汚いなどの区別は、人間が勝手にレッテルを貼った分別の結果であって、そのもの自体には存在しないのだと考えています。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

しかし、現実には私達が物事を区別してしまうのは、自分にとって都合のいいようにしたいという思いが働くからです。でもそれこそが迷いや生きづらさなどの苦の元凶なのです。その自分の都合を超えたところで実践せんとするのが作務という行為なのです。その事を道元禅師は『正法眼蔵(しょうぼうげんそう)』「洗 浄」の巻の中で「仏法に基づいてせんじょう 仏法を実践し続けること」とお示しになっています。

労働が作務という形で修行として高められた時、肉体労働が仏様のふるまい、悟の実現された姿となるのです。いにしえの百丈禅師ぜんじ禅師の働く姿も、現代の修行僧達いっしんふらんの一心不乱の雑巾ぞうきんがけも、仏法の実現された仏様の尊い姿そのものなのです。

皆様も今年の年の瀬には仏法の実践たる作務として一心にお掃除に取り組んでみてはいかがでしょうか。

— 終 —